

福間典海

旧名

三澤典海

ふくま・つねみ

みさわ・つねみ

福山誠之館校長(第14代)

経歴

生:明治16年(1883年)8月1日 島根県仁多郡横田村生まれ

没:昭和38年(1963年)9月11日、享年81歳、島根県飯石(いいし)郡飯南(いいなん)町頓原の墓地に葬る

在任期間

昭和6年(1931年)1月31日～昭和21年(1946年)3月20日
(15年2ヶ月)

関係略歴

明治16年(1883年)8月1日	—	島根県仁多郡横田村に生まれる
明治34年(1901年)6月20日	17歳	島根県松江市私立中学修道館第二学年受験、入学
明治38年(1905年)3月27日	21歳	島根県松江市私立中学修道館卒業
明治38年(1905年)9月10日	22歳	京都第三高等学校第一部入学
明治41年(1908年)7月1日	24歳	京都第三高等学校第一部卒業
明治41年(1908年)9月10日	25歳	東京帝国大学文科大学哲学科入学
明治44年(1911年)7月11日	27歳	東京帝国大学文科大学哲学科卒業
明治45年(1912年)4月1日～大正6年(1917年)4月30日	28～33歳	東京私立千代田高等女学校教員
大正6年(1917年)5月22日	33歳	福岡県女子師範学校教員
大正7年(1918年)3月31日	34歳	福岡県女子師範学校教諭
大正7年(1918年)4月15日	34歳	(兼任)福岡県女子師範学校舎監
大正8年(1919年)3月31日	35歳	愛媛県立松山商業学校教諭
大正11年(1922年)7月6日	38歳	愛媛県立八幡浜商業学校校長兼教諭
大正14年(1925年)8月25日	42歳	広島県立忠海中学校校長兼教諭
昭和4年(1929年)5月15日～6年(1931年)1月31日	45～47歳	広島県立呉第二中学校校長(第3代)兼教諭
昭和6年(1931年)1月31日～21年(1946年)3月20日	47～62歳	広島県立福山誠之館中学校校長(第14代)兼教諭
昭和18年(1943年)2月9日	59歳	勲五等瑞宝章
昭和20年(1945年)3月15日	61歳	従四位

関係年表

昭和6年(1931年)9月28日	満州事変起こる
昭和6年(1931年)11月5日	本校移転問題について本校同窓会評議員会開催
昭和7年(1932年)3月24日	本校移転告别式を講堂に於て挙行
昭和7年(1932年)7月4日	新校歌決定発表
昭和8年(1933年)2月23日	誠之館記念館竣工
昭和9年(1934年)10月25日	本校創立八〇周年並講堂新築落成式挙行
昭和12年(1937年)7月7日	日中戦争起こる
昭和13年(1938年)4月1日	「国家総動員法」公布
昭和16年(1941年)12月8日	太平洋戦争起こる
昭和18年(1943年)11月1日	本校創立九〇周年記念式典挙行
昭和20年(1945年)8月15日	太平洋戦争終わる
昭和20年(1945年)9月10日	普通授業に復す

生い立ちと学業、業績

「事績・業績」

大正から昭和にかけて、度重なる生徒定員増により本校霞町校舎は狭隘化し、しかも腐朽、特に運動場が狭く立地条件の上で拡張が難しかった。当時、三吉町にあった福山師範学校の廃止が決定すると、その跡地への移転問題が議論された。しかし、「誠之館」の歴史を刻んだ霞町校舎への思い入れも強く、校長より諮問を受けた同窓会の評議員会は約5時間の議論の結果、希望条項を挙げて、賛成した。その希望条項は、

- 1、玄関を移転して記念館を建設すること
 - 2、誠之館記碑を移転すること
 - 3、講堂の新築又は移転をすること
- 等である。

移転に伴う諸条件の解決だけでなく、要望条件を宿題としてもつこの校長の苦労は大変なものだったに違いない。そしてこれを満たしたことがこの校長の第一の業績である。

福山中学校校歌「神仙遊ぶ」は愛唱されていたが、そのメロディは第一高等学校の寮歌と同じであり、また校名変更、移転を契機にして、「純粹に我が誠之館のそれとして恥かしからぬ2つの新校歌」を発意したのが第二の業績であった。以後、戦後学制改革まで歌い継がれた。

満州事変から、太平洋戦争へと日本が動く中、本校の教育もそれに翻弄され、その責任を一身に背負う校長の苦悩は他のどんな業績よりも大きいものであったろうが、ここでは触れないことにする。

「修身の授業では難解な倫理学を哲学的考察のもとに解説し、また生徒に接しては、重厚にして気魄に富む人柄により強い感化力を発揮した。卒業生によれば、昭和7(1932)年三吉町への校舎移転直前、当時空屋になっていた寄宿舎への投石事件があった。その時福間校長は生徒を校庭に集め、「何れ近い日、諸君はこの校舎を去り三吉町校舎に移るが、長らく学んだ校舎は最後まで立派なすがたのまま残しておくのが人の道である。『飛び立つ鳥はあとを濁さず』と云う言葉がある。鳥さえ沼を飛び立つときには後からくる鳥のため水を濁さずに立つという。寄宿舎の窓ガラスを壊すなどという事は、鳥にも劣った行為である。」と諭した。この訓示には強い説得力があり、以後だれもガラス窓に投石するものはなかったという。(「誠之館中学の頃」熊本恵見、『回想五十年』67頁)

「校長の福間典海先生は、一種の名物校長で、いかにも教育者らしい真面目で端正な風貌と独特な語り口は教育者らしい重厚さで、職員生徒から大いに敬意を払われていた。3年生の12月、大東亜戦争突入の日、全校生整列して厳粛な訓辞に聞き入ったが、この日の朝の寒さは今も忘れられない。」(「昭和19年卒業生における在校の記録」岩崎博、『懐古』184頁)

在任期間が長い故もあるが、その強い教育力によって、数多くの思い出に登場する校長であった。 松岡義晃(昭和28年卒)

誠之館所蔵品

管理No.	氏名	名称	日付
03791	葛原しげる 差出	福間校長宛葛原しげる差出書簡(全11通)	昭和6年～昭和7年
04511	藤井清水 差出	福間校長宛藤井清水差出書簡(全2通)	昭和6年～昭和7年

関連情報1:『誠之館百三十年史(上巻)』、1065・1070・1072・1117・1189・1203・1218・1230 頁、福山誠之館同窓会編刊、昭和63年12月1日

関連情報2:『回想五十年』、67頁、福山誠之館抱十会編刊、昭和60年10月26日

関連情報3:『懐古』、184頁、「昭和十九年卒業生における在校の記録」、岩崎博、福山誠之館同窓会編刊、昭和58年5月15日

関連情報4:『心の歲月』、「学校の思い出」、網野菊著、新潮社刊、昭和47年1月

関連情報5:『誠之館同窓会会報(特別号)』、93頁、「恩師群像」、西上一義、福山誠之館同窓会編刊、平成17年2月

関連情報6:『記念誌 広島県立呉宮原高等学校』、12・511 頁、九嶺宮原同窓会編刊、昭和49年11月21日

2005年2月7日更新:写真●2005年4月5日更新:経歴・本文・関連情報●2005年8月19日更新:関連情報●2006年3月27日更新:本文・所蔵品●2006年6月29日更新:氏名(旧姓)・関連情報●2006年12月8日更新:レイアウト●2007年5月1日更新:関連情報●2007年7月20日更新:経歴●2008年3月7日更新:経歴・本文・関連情報●2009年7月31日更新:誠之館所蔵品●